
並でいいじゃないか、並で

万里雁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

並でいいじゃないか、並で

【Nコード】

N3528Z

【作者名】

万里雁

【あらすじ】

どうも、始めましてアッキーです。

この物語は多分普通の高校生の俺とどう考えても普通じゃない友人達の何処にでもある普通の高校生活をお送りしていく予定です！

笑いはあるのか！涙はあるのか！青春はあるのか！恋愛はあるのか！まったくもって考えはありません！

完全自己満足気味でお送りしていきますが、どうぞ見てやってください。

第1話 俺と奴等のクリスマスイブ（笑）（前書き）

始めまして、万里雁です。

自分で書いててよく分からなくなったりしてたけど、暇な時にでも目を通してやってください。

第1話 俺と奴等のクリスマスイブ（笑）

12月24日

皆さんにはこの日が何の日かお分かりだろう。

そう、あの彼氏彼女持ちのリア充共の1年に1度の大イベント『クリスマスイブ』である。

現在の時間は午後6時30分。

外は一面銀世界のホワイトクリスマス（合ってたっけ？）。

今頃世のリア充共は乳繰り合っている頃だろう。

え？俺が何をしてるかって？

そんなのお前決まってるじゃねーか。

1人ですよ。

自分の借りてるマンションの1室で、たった1人で夕飯の支度をしていますよ。

どうせ彼女居ない暦Ⅱ16年（自分の年齢）のですよ。

高校に入った所で彼女なんて出来ませんでしたよー！

だから彼女なしで寂しく過ごすクリスマスなんて慣れてますよ、へっちゃらですよ。

あはははは、あはははははは。

……自虐終了。

もう少ししたらあいつらも来る事だし、それまでに食材の準備しなくちゃ。

あいつら今日も部活あったらしいし、腹ペコのままうちに来るはずだから一応出来るだけたくさんの食べ物用意しとかないと。

料理も出来上がり、さらに盛り付けテーブルに運んでる最中奴等は来た。

ピンポーン。がちやがちやがちや。

チャイムを1回押してからあのがちやがちやはあいつだ、あいつらしか居ない。

毎回あいつらはどうやってこのマンションに侵入してきてんだろ、ここオートロックのはずなのに。とりあえずドアホンで止めよう。

「今行くから、静かにしとけ」

がちやがちやがちやがちや。

まるで返事のように返ってくるこの音。

一向に止めようとならない馬鹿どもにイラつきながらドアを開けると、そこにはサンタが居た。

3人も。

「「「メリークリスマス！」」」

「……永遠にさようなら」

「待てーい」

目の前の状況を認めたくなくて、とっさに閉めようとしたドアの隙間に足を突っ込まれた。

これじゃ閉められない、最悪だ。

さらにあいつこじ開けようと手まで挟んで引っ張ってやがる。

「すいません、足と手抜いて貰えませんか？」

そうしないと閉めれないんで。

「抜いてもいいけど、抜いたらお前絶対閉めんだろ？」

「そうに決まってるだろ、俺の知り合いにサンタは3人も居ない。3人どころか1人も居ない」

永遠にさようならって言ったじゃん。

「んじゃ、抜けねーな。さっさと観念してドア開けろ」

「嫌です。心の底から嫌なんです」

「や、こんな格好で来たのは謝るからさ、まじで開けてくれない？外の寒さまじでヤバイから。俺ら死んじゃうから」

「結構じゃねーか。問題児が3人も居なくなってくれて、学校も喜ぶだろ」

もしかしたら俺賞状貰えるかも。

「いやいや、そうかもしれないけど、お前だって嫌だろ？家の前でサンタの格好した奴が3人も死んだら。色々嫌な噂が立っちゃうよ？」

「新聞勧誘やら何やらの面倒臭いのが来なくなるだろうから願ったり叶ったりだ」

「いや、そうかもしれないけど……そろそろまじで開けてくんない？ 後ろの2人が喋れない程度には死んできてるからさ」

「ちっ、しょうがねー。さっさと入りやがれー」

さすがに可哀想になってきたからドアを開けてやると、3人が雪崩のように入ってきた。

本当に顔が死んだかのように白かった。

「「「生き返るー」」」

「おめえらそんな玄関の床で寝そべってないで、さっさとそのふざけた服脱いでリビングで行け。料理はもう出来てる」

「「「あいあいさー」」」

返事だけはいっちょ前のようだ。

あいつらさっきまで死人みたいだったくせに。

「「「うおおおおおお！！」」」

「摘み食いした奴は叩き出すからな！」

リビングの方から馬鹿どもの雄たけびが聞こえてきた。

お互いに隣の部屋から苦情が来ても可笑しくないレベルだ、防音で良かった。

リビングに行くとサンタの服の下は制服だったのかワイシャツ姿の

馬鹿が、犬で言う所の『待て』状態でテーブルを囲んでいた。

「おお、よく待てたじゃん。んじゃ、いただ」

「違うだろ、今日は『メーリークリスマス』だ」

そんなのどっちでもいいだろ!?

「……メーリークリスマス」

「「メーリークリスマス!!」」

「うめー!」

「何これ、めっちゃうめー!」

「やっぱ、アッキーの料理は最高だな!」

1人だけテンションの低い俺を置いて、奴等はバクバクと俺の料理を食い始めた。

3時間もの俺の努力が奴等の胃袋に消えるのに1時間もかからなかった。

「そこじゃおりゃあー!」

「はっはー!俺にそんなもんはきかんわー!」

「な、何だとー!?」

何だあの3文芝居は。

そしてなんであんなのをBGMに洗い物をせにやらん。

今手に持つてるこの皿ぶつけてやろうか？

「ごめんな、アッキー。あいつらお前に全部押し付けちゃって」

そう言いながら洗い物を手伝ってくれてんのは、3馬鹿唯一の良心、橋田五郎。

現役高校生球児、身長180以上で顔は優男って感じた、丸刈りだけど。ちなみにポジションはファーストで、ジャイロボールは投げられない。

ちなみに先程のサンタ事件でドアの間に足を挟んできたのがこいつ。

「別に大丈夫だよ、うちでクリスマスパーティー開くって決まった時点でこうなるの分かってたから。それに俺こういうの嫌いじゃないし」

「そうか？お前がそう言うならいいんだけど」

「所であいつらは何をしてんだ？なんか棒みたいのでチャンバラしてっけど」

「ああ、この間ス〇ー・ウォーズの映画みたらしい。それでなんかハマったんだって」

今更かよ…、公開されてから何十年経ったと思ってんだ。

「あいつら馬鹿だからしょうがないよ。あ、これで最後だ」

洗い物が終わって橋田とリビングに戻ると、そこには力尽きた馬鹿が2人居た。

「お前ら何やってんだよ…」

「あ、アッキー、キューちゃん。洗い物お疲れー」

「飯も美味しかったし洗い物も出来るなんて、アッキーはいいお嫁さんになるね」

誰がお嫁さんになんてなるか。俺は男だ。

こいつらは上から井上翼と手塚卓郎。

特徴は……面倒臭いからいいや。

「なんか今アッキーとても失礼な事思わなかった？」

「俺もなんか馬鹿にされたような気がした」

ちっ、こんな時だけ勘のいい奴等だ。

しょうがない、こいつらも紹介しといてやるか。

井上は髪の毛を茶色に染めていて、かなりのイケメンだ。後サッカー部に所属してるけど、オーバーヘッドは出来ないし、この間無理やりやらせたら失敗した。

手塚はテニス部に入っている。零式ドロップをして欲しいと頼んだが出来ないらしい。

その中性的な顔立ちで女子にとっても人気だ。

てか、手塚だけじゃなくこいつら全員女子にはモテる。

橋田だって一年生にして野球部の主砲だし、井上はサッカー部のエ

ーストライカーだからだ。

だからこいつらは入学してからの8ヶ月何十人もの女子に告白され、不思議な事にその全てを断っていた。

いつも「リア充死ねー」「彼女欲しー」とか言ってるくせに。（俺は毎回「お前らが言うか！」と心の中で突っ込んでいる）

皆さんお察しのうちに、そんな彼等と違ってはっきり言って俺はモテない。

高校に入学してから1度だけ女子に呼び出された事があったけど、それはこいつらの好みを聞きたいだけだった。

まあ、そんなもんだろう。と思って、正直にこいつらが前に言っていた好みを教えてあげて、さらに少しだけ他の事もアドバイスしてあげた。

するとどうなるだろう？

結果として、俺に恋愛相談してくる奴（男子も含む）がたくさん生まれました。その中にはこいつらとは関係なく、「好きな人を振り向かせるにはどうしたらいいか」とか「彼との初デートどんな格好の方がいいのか」などという物まであった。

NOが言えない日本人の鏡である俺は全てに嫌々ながら答えてやった。

……笑えばいいさ。

彼女も居ないのに他の奴の恋愛相談や恋人との惚気話をクリスマスイブにまで電話やメールで聞かされてる俺を大口を開けて笑えばいいさ。

あはははは、あははははははって笑えばいいだろ！
うわああああああん！

「アツキー何1人で百人相してんの」

はっ、

あぶない、あぶない。

もう少しで危ない所まで行っちゃもう所だった。

ありがとう、橋田。

君は俺の命の恩人だ。

「何でも無いよ。(どうせお前達には分からない事だよ!)」

「そうか」

「アツキー! さっさとクリスマスケーキ食おうぜ!」

「俺もケーキが食いてー!」

「そうだな、ちょっと取ってくるよ」

「よっしゃー! クリスマスはこれからだぜー!」

「盛り上がって行こー!」

「お前らはしゃぎ過ぎんなよ」

「分かってやすって、橋田の旦那」

「翼何そのキャラ!」

「「「あははははは」」」

あいつら本当に元気だな。

冷蔵庫から取り出したケーキを持ちながら、彼らの馬鹿らしいやり取りに耳を傾ける。

（確かに彼女は居ないが、それなりに楽しいクリスマスになりそうだな）

ケーキまだかー！とか騒ぎ始めた彼らを見ながら、そう思った。

俺達の眠れないクリスマスはまだまだこれからのようだ。

それでも、
やっぱり、
彼女欲しー！

第1話 俺と奴等のクリスマスイブ（笑）（後書き）

やっぱりねー、彼女は欲しいんだよ、うん。

と言うことで、第一話はこんな感じでした。
誤字脱字感想など待ってます。（特に感想）

第2話 俺と奴等の大晦日（前書き）

2話目です。

どうぞよろしく。

第2話 俺と奴等の大晦日

「行くぜー！滅びのバーストストリーム！」

「馬鹿め、カウンター毘發動！マジックシリンダー！」

「ふんっ、どっちが馬鹿だ！こっちだってカウンター毘發動！トラップジャマー！」

「な、なんだと！？」

「ふはははは！これでブルーアイズのダイレクトが決まって俺の勝ちだ！」

「くそおおおお！」

「おっしやああああ！」

「ま、待て！もう1回だ！もう1回！」

「何度やっても俺の絶対的勝利は揺るがない！」

「勝手にほざいてろ！そんな幻想俺がぶっ壊してやる！」

12月31日、大晦日。

現在俺は井上の家に居る。

上の会話は馬鹿（手塚）と超絶馬鹿（井上）が遊○王で遊んでいる最中に交わされていた物だ。

まったく馬鹿丸出した。

俺と橋田はこいつらのテンションに着いていけずに部屋の隅で体育座りをしている。

ちなみにこいつらが大人しくなったのはこの2時間後である。

「結局俺の全勝だったな」

「次は俺が勝つ！」

「だったら今相手」

「いい加減にしろ！」

「「痛てゝ；ω；」」

遂に堪忍袋の尾が切れた橋田が2人の頭に拳骨を喰らわせた。2人とも涙ぐんでる、軽く同情する。

「何だよ、ハッシゝ！痛いじゃねーかよ」

「井上お前人の事呼び出しといて、何しとんのじゃゝ！」

「そ、それはそうだけど、そんなに怒らないでよ…」

いやゝ、やっぱり橋田は怒ると恐いねゝ。いつもはめっちゃ優しいのに、怒ると人が変わるんだから。

あ、さすがに首根っこ掴んで持ち上げるのは止めてあげて、井上の

顔が外の雪みたいに真っ白になってるよ。手塚はもうすでに白目剥いて死んでるし。

「げほっげほっ、あゝ痛てゝ。ごめんよゝ、ハッシー、アッキー。だから許してゝ」

「さっさと用件を言え」

「うんとね、皆で賭けをしようかなゝなんて思っただけど…」

「賭け？」

「何すんだ？」

「えっとね、皆にね来年の目標をそれぞれ紙に書いてもらって、それを混ぜて1人ずつそこから一枚ずつ抜いていって、そこに書いてあることを来年やってもらうって奴。どう、面白そうでしょ？」

「確かに…」

「井上にしてはまともなの考えてきたじゃん」

「アッキー酷い」

「ごめんごめん、で？いつやんの？」

「今すぐでもいいんだけど、誰かさんがてっちゃんこんなんにしちゃったからな」

「何か言ったか？」

「何も言っておりません！」

弱っ！

橋田にちよつと睨まれたからってどんだけさっきの怖かったんだよ、また涙ぐんでるし。

こいつらは手塚が復活するまでこんな感じだった。

結局俺は井上の提案を受け入れてしまった。

この後散々後悔するとは露も知らずに。

「と言うことで、皆さん準備は良いですか？」

「準備って渡されたこの紙に来年の目標を書けばいいんだろ？」

「そうそう、じゃその紙プリーズ」

俺達3人の紙を回収した井上は自分のも一緒に混ぜ始めた。

ちなみに俺は『1年間無遅刻無欠席』と書いておいた。

これなら万が一自分で引いた時にも、遅刻なんて一回もしてない俺は別に困らないからな。

「まっぜゝ、まっぜゝ、まぜまっぜゝ」

でも、問題は他の3人が何を書いたかだ。

橋田は俺と同じ様に自分で引いた時のリスクを考えて無難なものにし

てるはず。

橋田のを引いたとしてもそれは一応セーフだ。

手塚も馬鹿だけど一応の知能はあるから、変な事でも実行不可能な事は書いてないだろ。

だから手塚の制限もなくアウトに近いがぎりぎりセーフな気がする。

「ぐるぐるぐるぐるぐるるるる」

最悪なのは井上のを引いてしまった時の事だ。

こいつは本当の超絶馬鹿だから自分が引くリスクなんて考えずに、『全教科オール5』とか『世界一周』みたいな明らかにやばい事が書いてあるはずだ。

こいつのは完全にアウトだ。引いたら死んだも同然、そこには地獄が待っている。

「これぐらいでいいだろ。よっしゃー、皆で引く順番を決めるジャンケンしよーぜ」

「ジャンケンで決めんの？」

「そう、勝った順に引いて行くなって事でどうよ？」

「いいんじゃない」

「文句は無い」

「それじゃー、ジャンケンポン！」

俺…グー

橋田…パー
手塚…グー
井上…グー

「いよっしゃー！」

「「くっそー！」」

最初の一回で1人勝ちするなんて、橋田の奴なんて運の良い奴だ。

「じゃあ、引くぞ。……………これだ！」

橋田はテーブルに置いてあった紙の左から二番目のを引いた。

「えっと、何々？『1年間無遅刻無欠席』？」

「ああ、それ俺のだ」

「やっぱり、アッキーのか。ここまで無難なのはアッキーの奴ぐら
いだもんな」

一番安全な俺の奴が引かれちゃったぜ。

まあいい、まだ橋田のが残ってる。

「じゃあ、二回戦！ジャーンケーンポン！」

俺…チヨキ
手塚…グー

井上…チヨキ

「やったー！」

二回戦に勝ったのは手塚のようだ。
手塚はそのまま何にも迷わずに紙を引いた。

「これにしょ、何々？『長期休暇の時の手塚の宿題を全部やる』ってこれ俺が書いた奴じゃん！」

どうやら手塚は自分で書いたのを引いたらしい。

『長期休暇の時の手塚の宿題を全部やる』って引いてたら軽く嫌だったな、ここで出ておいて良かった。

肩を落としてるが手塚が抜けた事に残ったのは俺と井上のみ。

そして残ってる紙は橋田が書いたのと、井上の書いた地獄への案内状だけだ。

「ふふふ、結局は俺達2人の一騎打ちになったな。俺には最初からこうなるって分かってたぜ？」

「んなわけねーだろ、いったいお前は何処の預言者だ」

「そんな事を言ってられるのも今のうちだぜ。アッキーには絶対に俺のを引かせてやる」

「ちなみにお前は何て書いたの？」

「秘密だ。それじゃ行くぜー！ジャーナーケーナーポーン！」

俺…グー

井上…グー

「あーいこーでしょ！」

俺…チヨキ

井上…チヨキ

「さつさと負けちまえ！」

「お前が負けろ！」

「うるせえー！あーいこーでしょ！」

俺…チヨキ

井上…チヨキ

「なんでチヨキなんだよ！？順番で次はパーだろ！」

「そんなん読んでるに決まってるだろ！」

「これで決めてやる！あーいこーいこーでしょー！」

俺…グー

井上…

パー

「何故だー！」

「いよっしゃー！」

負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた。

俺が井上に負けた。

「で、でも、お前が自分のを引けば俺の勝ちだ」

「何言ってやがる、俺は自分のがどれくらい分かつとるわ！」

井上はそう叫ぶと自信満々に残った左側のを掴み取った。

そして、その紙に書かれてある言葉を見て、ニヤニヤと気持ちの悪い笑顔で俺に紙を見せてきた。

そこには、『成績で4をとる』と書かれていた。

「あ、それ俺が書いた奴だ」

「やっぱりハッシーのか、どうせ体育で5は取れるからこの目標は楽チンだな」

そうなんだよ、こいつら普通の科目は寝てばっかで2ばっかなのに、体育だけは真面目で5取るんだよ。

橋田はやっぱり自分にとって無難なのを書いたって事か。

「それじゃ、次はアッキーの番だぜ？」

「うううう」

嫌だ、絶対に引きたくない。

こいつがこんななににやけるって事は相当変なことが書いてあるはず。そんなの分かってて誰が引きたがるか。

「さっさと引けよ」

「うっさい、今引くわ！」

「引っけ！引っけ！引っけ！引っけ！引っけ！引っけ！」

こうなったら自棄だ！

俺はテーブルに一つ残された紙に手を伸ばして、それを掴んだ。そして、紙に書いてある事を読んで俺は言葉を失った。

紙にはこう書いてあった。

『今年中に彼女を作る』

その時遠くの方から新年を告げる除夜の鐘の音が聞こえてきた。

それは俺にとっての最悪の1年の始まりを告げているようだった。

第2話 俺と奴等の大晦日（後書き）

こんな感じの2話でした。

誤字脱字感想（特に感想） バシドシ受け付けてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3528z/>

並でいいじゃないか、並で

2011年12月13日00時58分発行